

学校编码: 10384
学号: 12220071151816
UDC ____

分类号__密级__

厦 門 大 学

硕 士 学 位 论 文

『新撰万葉集』の風物表現に関する和漢
比較研究

——上巻の和歌と漢詩を中心に

《新撰万叶集》景物表现的和汉比较研究

——以上巻的和歌和汉诗为中心

黄丹蓉

指导教师姓名: 黄少光 副教授

专 业 名 称: 日语语言文学

论文提交日期: 2010 年 4 月

论文答辩时间: 2010 年 6 月

学位授予日期:

答辩委员会主席: _____

评 阅 人: _____

2010 年 4 月

厦门大学学位论文原创性声明

本人呈交的学位论文是本人在导师指导下,独立完成的研究成果。本人在论文写作中参考其他个人或集体已经发表的研究成果,均在文中以适当方式明确标明,并符合法律规范和《厦门大学研究生学术活动规范(试行)》。

另外,该学位论文为()课题(组)的研究成果,获得()课题(组)经费或实验室的资助,在()实验室完成。(请在以上括号内填写课题或课题组负责人或实验室名称,未有此项声明内容的,可以不作特别声明。)

声明人(签名):

年 月 日

厦门大学学位论文著作权使用声明

本人同意厦门大学根据《中华人民共和国学位条例暂行实施办法》等规定保留和使用此学位论文，并向主管部门或其指定机构送交学位论文（包括纸质版和电子版），允许学位论文进入厦门大学图书馆及其数据库被查阅、借阅。本人同意厦门大学将学位论文加入全国博士、硕士学位论文共建单位数据库进行检索，将学位论文的标题和摘要汇编出版，采用影印、缩印或者其它方式合理复制学位论文。

本学位论文属于：

1. 经厦门大学保密委员会审查核定的保密学位论文，
于 年 月 日解密，解密后适用上述授权。
2. 不保密，适用上述授权。

（请在以上相应括号内打“√”或填上相应内容。保密学位论文应是已经厦门大学保密委员会审定过的学位论文，未经厦门大学保密委员会审定的学位论文均为公开学位论文。此声明栏不填写的，默认为公开学位论文，均适用上述授权。）

声明人（签名）：

年 月 日

厦门大学博硕士学位论文摘要库

レジュメ

「国風暗黒時代」から「和風復興時代」へと進行していった過程に成立された『新撰万葉集』（以下は「本集」とも）は、日本古典文学史上で極めて重要な地位を占めている。本集は上下二巻からなるが、上巻は和歌とともにその左に七言絶句が付されているもので、特別な編纂意図が含まれるに違いない。その「和漢共存」という点で和漢比較文学学界の注目を引き続く。

今日まで、「和漢共存」から主に本集における和漢詩歌の表現や和歌と漢詩との関係論をめぐって行われてきたが、本集の日本古典文学史上における地位をより客観的に把握するために、更なる研究が期待される。本論は、本集の漢詩作者は本集の和歌の鑑賞者でもあることから出発し、従来の本集の漢詩に対する偏見に挑み、『新撰万葉集』上巻の和歌とそれに付される漢詩を、平安人の作詩を中心とする文学上の訓練とその成果の総決算の縮図の一つと見なす。その認識の上で、先学の研究成果を踏まえながら、それまでの和歌伝統とその作詩訓練の成果を呈している個々の風物に対する和歌と漢詩の対応表現を考察する。本論は次の部分から構成されている。

第一章 序論 研究対象である『新撰万葉集』の概況および今日まで本集をめぐって行われてきた研究成果を纏める上で、『新撰万葉集』上巻における風物の和漢の表現という問題を提起して、本論の目的を明らかにする。

第二章 本集の上巻の春歌に載る「梅」の歌とそれに付される詩を分析する。漢文学との交流から発生した梅の香を享受する和歌の詠歌傾向を明らかにし、日本古典文学史上においてその意義を述べる。そして、それに付される漢詩の対応の様態を検討する。

第三章 本集の上巻における「桜」の歌と詩についての考察である。万葉集を参照し、「鶯と散る桜」と『咲く桜』から『散る桜』へ」との二節に分けて、本集和歌における「桜」を享受する様態を確認し、更にそれに付される漢詩がその享受の様態をどう受け止めているかを窺う。

第四章 本集の上巻に出る和漢文学ともに愛用された風物である「蟬」に対する和と漢の表現を比較する。万葉時代からの表現伝統、当時の文化風土と漢文学の受容を合わせて「蟬」の歌の実態を調べ、番いの漢詩は歌に対応した際に表れた態度を確認する。

第五章 本集の上巻にある日本的色彩の濃い風物である「萩」や「藤袴」や「大和撫子」の和漢の表現を検討する。歌における「萩」、「藤袴」と「大和撫子」に対する表現に注いだ努力を確認する。また、それらの風物に対する漢詩での再現に焦点を当て、漢文学に引き合わせて理解を求めようとする漢詩人の試みを指摘する。

第六章 結論

キーワード：『新撰万葉集』上巻；自然風物；和漢の表現

摘要

《新撰万叶集》成立于“国风暗黑时代”向“和风复兴时代”转变的过程中，在日本古典文学史上占有极其重要的地位。该集由上下两卷组成，其中上卷的每一首和歌的左边都附有一首七言绝句，可以说包含着编撰者特殊的编撰意图。该集这种“和汉共存”的特点不断吸引着和汉比较文学学界的关注。

至今为止的研究主要是从“和汉共存”出发，围绕该集的和歌和汉诗的表达、抑或是和歌和汉诗的关系论而展开的。为了更加客观地把握该集在日本古典文学史上的地位，我们要对“和汉共存”这一点开展进一步的研究。本论文把该集的汉诗作者看成该集和歌的鉴赏者之一。并由此出发，摒弃一直以来对本集的汉诗所持的偏见，把《新撰万叶集》上卷的和歌和其相应的汉诗当做平安人在以作诗为主的文学训练中所取得的成果的总结的一个缩图。从该集的和歌和与其对应的汉诗可以窥见当时为止流传下来的和歌传统和汉诗训练的成果。本论文就是在这个认识的基础上，援引已有的研究成果，选取若干景物，考察该集上卷的和歌和与其对应的汉诗对这些景物的表达。本论文由以下部分组成。

第一章 序论 概括了本论文的研究对象《新撰万叶集》的概况及至今为止围绕该集所进行的研究所取得的成果。在此之上，提出本论文的所要研究的问题，即《新撰万叶集》上卷和歌和汉诗对景物的表现，明确本论文的研究目的。

第二章 分析该集上卷春歌中与“梅”有关的和歌和其对应的汉诗。明确和歌在和汉文学的交流中开始赏玩梅香，使得咏梅香成为一种吟梅歌的倾向，并且论述其在日本古典文学史上的意义。探讨其相应的汉诗对和歌的对应情况。

第三章 考察该集上卷中与“樱”有关的和歌和汉诗。参照万叶集的情况，从“莺与落樱”和“从‘开放的樱’到‘凋落的樱’”两方面来确认该集中对“樱”的赏玩情况，并进一步探讨其相应的汉诗对这种赏玩情况的接受情况。

第四章 比较研究该集上卷的和歌和汉诗对“蝉”这一备受和汉文学青睐的景物的表现。结合万叶时代以来的表现传统、当时的社会文化背景和汉文学的影响，对有关“蝉”的和歌的表现情况进行调查，也阐明其相应的汉诗在对应和歌时所表现出的态度。

第五章 探索该集上卷中和歌和汉诗对具有浓厚日本色彩的景物“萩”（胡枝子）、“藤袴”（泽兰）和“大和抚子”（石竹花）的表现的情况。明确和歌在表现这些景物时所做的努力，并且把焦点放在汉诗对这些景物的再现上，指出汉诗作者努力将之引进汉文学，力图取得汉文学的理解。

第六章 结论

关键词：《新撰万叶集》上卷 自然景物 和汉的表现

目 次

第一章 序論	1
1.1 『新撰万葉集』とその周辺	1
1.2 『新撰万葉集』における風物表現と本論の目的	6
第二章 新風の吹かれる風物——梅	9
2.1 はじめに	9
2.2 春に漂う「梅の香」	9
2.3 「初花」と「初鳥」	17
2.4 結び.....	22
第三章 梅と競演する花——桜	23
3.1 はじめに	23
3.2 鶯と散る桜	23
3.3 「咲く桜」から「散る桜」へ	30
3.4 結び.....	32
第四章 異なる文化風土での鳴き声——蝉.....	34
4.1 はじめに	34
4.2 『新撰万葉集』上巻における「蝉」	34
4.3 結び.....	41
第五章 和から漢への「花道」——萩、藤袴と大和撫子.....	43
5.1 はじめに	43
5.2 『新撰万葉集』上巻に詠まれる「萩」、「藤袴」、「撫子」	44
5.3 結び.....	52
第六章 結論	54
参 考 文 献	58
謝 辞.....	62

厦门大学博硕士学位论文摘要库

目 录

第一章 序论	1
1.1 《新撰万叶集》概述及概况	1
1.2 《新撰万叶集》的景物表现和本论的目的	6
第二章 新气象中的景物——梅	9
2.1 引言	9
2.2 弥漫春天的“梅香”	9
2.3 “初花”和“初鸟”	17
2.4 小结	22
第三章 与梅争奇斗艳之花——樱	23
3.1 引言	23
3.2 莺与落樱	23
3.3 由“开放的樱”到“凋落的樱”	30
3.4 小结	32
第四章 不同文化土壤中的鸣叫声——蝉	34
4.1 引言	34
4.2 《新撰万叶集》上卷的“蝉”	34
4.3 小结	41
第五章 从和到汉的“鲜花道”——萩、藤袴和大和抚子	43
5.1 引言	43
5.2 《新撰万叶集》上卷中的“萩”、“藤袴”和“大和抚子”	44
5.3 小结	52
第六章 结论	54
参考文献	58
致谢	62

厦门大学博硕士学位论文摘要库

第一章 序論

1.1 『新撰万葉集』とその周辺

『新撰万葉集』（以下は本集とも）は上下2巻から成る。そのうち、上巻には寛平5年（893）の序が付き、菅原道真が撰したと伝えるが^①、未だ定論ではない。下巻にも「延喜十三年（913）八月廿一日」の日付の入った序が付けられている伝本がある^②。本集の歌は「寛平御時后宮歌合」と「是貞親王家歌合」などを主な資料とし、上巻は春（21首）・夏（21首）・秋（36首）・冬（21首）・恋（20首）の五部からなり、下巻にも春（21首）・夏（22首）・秋（38首）・冬（22首）・思（26首、見出しには27首）と同じく五部ある^③。それに、和歌は万葉仮名で記し、更に上下巻ともに、歌1首ごとに七言絶句を配するが、下巻の漢詩では近体詩の作法に従うものが殆ど見当たらない^④。現段階では、少なくとも下巻の序文や漢詩は後人の追補とされている^⑤。従って、本論では当面、上巻を考察の対象にし、成立事情など不明な点の多い下巻には触れないことにしておくのである。

和歌と漢詩とを同一のアンソロジーに並列させる書物は、『新撰万葉集』の以前には存在しなかったものであり、いわば、異例の編纂物である。後に『和漢朗詠集』（1012年）などのように「歌」と「詩」の秀句を一冊に集めたも

^①久松潜一（編）．増補新版日本文学史2・中古[M]．東京：至文堂、1975：123-128．藤岡忠美．新撰万葉集[J]．和歌文学講座．東京：桜楓社．1970、(4)：290-310．によれば、「平安末期に成立した『日本紀略』寛平五年九月二五日の条に、『菅原朝臣撰進新撰万葉集二巻』とあり、また、同時期の仁安元年（一一六六）に成った『和歌現在書目録』にも、『新撰万葉二巻菅家』と記されている事例がある。この『和歌現在書目録』の作製に関係があったと見られる藤原清輔は、歌学書『奥儀抄』にも『天神撰、俗名菅家万葉集』と記している」と、歴史文献による本集が平安末期には一般に菅原道真の撰として信じられていたことをまとめている。

^②久松潜一（編）．増補新版日本文学史2・中古[M]．東京：至文堂、1975：123-128．

^③歌の数は高野平の『新撰万葉集に関する基礎的研究』を基準にする。

^④黄少光．新撰万葉集の成立[J]．東アジア比較文化研究・創刊号．東京：東アジア比較文化国際会議日本支部編、2002年6月．

^⑤藤岡忠美．新撰万葉集[J]．和歌文学講座．東京：桜楓社．1970、(4)：290-310．では、下巻について二つの説を纏める。一つに、下巻の道真撰説を否定するものである。本居宣長は『玉勝間』の中で、上巻と比べて下巻の漢詩のできばえが、まるで「寝言」のように見劣りするから、下巻の詩は道真の撰ではないとし、尾崎雅嘉がこの説を承け、『群書一覽』で道真作と否定した。また、現代に到って、久曾昇が文献的な実証でこの説を強化した。もう一つに、上・下巻ともに道真の撰ではないとしたものである。賀茂真淵は『うひまなび』に『菅家の作ならず』と断じ、のちに山岸徳平がその真淵説を承け継いだ。

のもあるが、基本的に本集とは性格が異なる。そこで、本集が成立した九世紀末という時代背景に注目しなければならないのであって、文運が激しく動いたこの時代の流れを今一度確認しておくべきであろう。

奈良時代中ごろの『万葉集』（759年以後）の成立以後、平安遷都（794年）をはさみ、九世紀の半ばまで、律令体制を強化する一環として、日本の朝廷はいっそう漢文化へ傾斜した。その結果、和歌に対する関心は公的な場からおいやられた。そして、嵯峨・淳和朝に至り、唐風文化、漢文学の隆盛がその頂点を極めた。奈良時代の私撰漢詩集『懐風藻』（751年）の流れをくみながら、『凌雲集』（814年）、『文華秀麗集』（818年）、『経国集』（827年）といった、日本文学史上嚆矢となる勅撰漢詩集が編まれた。この時期、嵯峨天皇を中心とした宮廷漢文学サロンが形成され、小野篁、空海など、数多くの漢詩人が活躍した。勅撰漢詩集のほか、史書・法典・字書・旅行記など、悉く漢文によるものであり、男子官人による漢学の隆盛をみせたのである。いわゆる国風暗黒時代である。

894年に菅原道真の提言で遣唐使が廃止され、この頃より国風文化時代の幕が開く。九世紀後半には、従来の漢字ばかりの万葉仮名による表記にかわって、片仮名・平仮名という日本独自の表記方法も発明された^①。古代日本人が次第に自分の感情を自国の文字で表現することが可能になり始め、歌が再び蘇生の泉を得て甦った。遣唐使廃止後、和歌への関心が急激に高まり、ついに十世紀の初頭に、最初の和歌勅撰集である『古今集』（905年）が編纂された。

このように、和歌と漢詩とを並存させる場としての『新撰万葉集』は、国風暗黒時代から、和風復興へと進行した時代の中継点で編纂されたものである。また、その成立は、『万葉集』と『古今和歌集』との間の、約150年の和歌史の空白を埋めることにもなる。無論、国風暗黒時代から和風復興時代へと、その架け橋として、本集が持つ文学史的な意義には計り知れないものがある。

それにしても関わらず、現段階では本集に関する研究は必ずしも充分に行

^①小島憲之、古今集以前——詩と歌の交流[M]、東京：塙選書、1975：14

われているとは言えない。ここで纏めておこなうならば、本集をめぐる今日までの研究は、最も基礎となる校本研究^①の以外に、おおよそ以下の三つの方面で展開されている。

第一に、序文に関する研究。寛平五年と明記されている上巻序文には「夫れ万葉集は古歌の流なり…（中略）…凡厥の草稿とする所、幾千といふことを知らず、と。漸く筆墨の跡を尋ねるに、文句錯乱して、詩にあらず賦にあらず、字対雑揉して、入るに難く悟るに難し。所謂仰げば弥高く、鑽れば弥堅きものか。然して意有る者は進み、智無き者退は退くのみ。是に於いて綸綍を奉り、総輯せるの外、更に人工に在るものを尽くして、以て撰集して数十巻と成す」という記載がみえることに基づき、かなり早い時期から、主に万葉学者らが「万葉総輯」説を展開してきた^②。一方、「先生は啻に倭歌の佳麗を賞するのみにあらず、兼ねて亦一絶の詩を綴りて数首の左に挿す」のように「先生」（「先王」となる異本もあるが、誤写である）という表記があることから、本集の撰者は菅原道真かと推測されてきた。また、漢詩の作者も道真かどうか、或いはその門下生なのか、漢詩作者はただ一人だったのかなど、推論の領域で展開されてきた論考がかなり多い^③。さらには、下巻にも延喜十三年と記す序文があり、上下巻の成立について、原撰本と増補本という議論もされてきた^④。

第二に、本集における和漢詩歌の表現に関する考察。これは主に比較文学論の影響のしたにある論考が多い。その中には語彙レベルでの考察もあれば、詩歌の構造論で解析するものも見られる。特に白詩圏の影響説が目立つよう

^①その成果を浅見徹。新撰万葉集の伝本に関して[J]。国語国文。1977、(46-5)；浅見徹。『新撰万葉集』の伝本に関して（続）[C]。日本文学・日本語。1977、(2)：76-94；高野平。八雲軒本と原撰本新撰万葉集について（1）—藤波家本その他の伝本にもふれて—[J]。語文（日大）。1966、(25)；高野平。八雲軒本と原撰本新撰万葉集について（2）—藤波家本その他の伝本にもふれて—[J]。東横学園女子短期大学紀要。1967、(5)；高野平。八雲軒本と原撰本新撰万葉集について（3）—藤波家本その他の伝本にもふれて—[J]。東横学園女子短期大学紀要。1968、(6)。などの業績に参考されたい。

^②編纂論序説。万葉集講座・第六巻[M]。1933。において最初に万葉集総輯説を提出した先学は澤瀉久孝である。に参考されたい。以後、中西進や山口博などが同じく主張した。その辺は中西進。続・万葉集の形成（下）—平安朝文献の意味—[C]。成城国文学論集。1968。や山口博。菅原道真の万葉集総輯[J]。和歌文学研究。1969。などに参考されたい。

^③新聞一美。新撰万葉集序についての覚書[J]。甲南大学紀要（文学編）。2003：14-18。

^④久松潜一（編）。増補新版日本文学史2・中古[M]。東京：至文堂、1975：123。第三章、「和歌と歌謡・二・私撰集・『新撰万葉集』」に参考されたい。

である^①。

第三に、和歌と漢詩との関係論。最近では、いわゆる和歌と漢詩との関係論で N グラムによる分析法が新しいが^②、この方法論の有効性についてはさらに確認を要する。従来では、主に四つの説が唱えられている。いわゆる川口久雄の翻訳説^③、小島憲之の解釈説^④、渡辺秀夫の文化的なコード変換説^⑤と呉衛峰の伝統的な表現展開説^⑥である。

これらの説の中で一般的なのは、『新撰万葉集』では和歌が漢詩に先行し、漢詩は和歌の左に添えられ、和歌の意味内容を翻訳説明しているといった論考が一般的である^⑦。そのために、本集に載る漢詩は低く評価されている。それを代弁するものの一つとして村上哲見の論述がある。氏は、「短歌で表現されている事柄は概ね七言の二句で尽くせるもので、七絶で対応させようとするれば、あとの二句の余裕をどうするかが問題になる。理論的に考えれば、後世の俳句をも含めて日本の短歌形式は、ことのほかに言外の意味というものを重んずるところに特色があるはずで、そのところを詩句に旨く写し取ることが出来ればよいと思われるけれども、『新撰万葉集』の漢詩にはほとんどそうした工夫を窺うことが出来ず、適当に引き伸ばしたり、あるいは別の事柄を持ち込んでつじつまを合わせるようなことに終始している」^⑧と酷評する。これは明らかに和歌の立場から漢詩を評価し、本集の漢詩作者が漢詩制作に込めた工夫を、その出来の良し悪しに関わらずに一網打尽にした論である。

それに対して、小島憲之は、「『新撰万葉集』の詩に対しては、一般に『拙

^①この中、最も先鞭をつけた学者は小島憲之。古今集以前——詩と歌の交流 [M]. 東京：塙選書、1975. である。他には、渡辺秀夫や津田潔などの業績も大きい。渡辺秀夫. 王朝詩歌の表現位相——詩語淘歌ことば [J]. 和漢比較文学会編『古今集と漢文学』和漢比較文学叢書 11. 東京：汲古書院、1992；津田潔. 『新撰万葉集』上巻・恋歌における白詩の受容について [J]. 白居易研究年報、2000. などの参考されたい。

^②代表人物は谷本玲大、「曖昧検索性を持たせた N-gram サーチの手法——『新撰萬葉集』と菅原道真の詩の比較を例に」（特集 2 N-gram が開く世界——確率・統計的手法による新しいテキスト分析）漢字文献情報処理研究 (2) [J]. 2001、(10) に参考されたい。

^③川口久雄. 平安朝日本漢文学史の研究 [M]. 東京：明治書院、1959—1961. に参考されたい。なお、翻訳説を最初に言い出したのは山岸徳平である。氏は「漢詩集と勅撰和歌集との関係的背景」 [J]. 国語と国文学、1941、(5) という論文の中で本集の上秋 25 の和歌と漢詩との関係について、「和歌を漢詩に翻案した」と記している。

^④小島憲之の「白詩の投影——新撰万葉集・古今集の周辺を中心として——」に参考されたい。

^⑤渡辺秀夫. 和歌と漢詩——『新撰万葉集』から『菅家万葉集』へ—— [J]. 国文学、1992、(10). に参考されたい。

^⑥呉衛峰. 和歌と漢詩の出会い——『新撰万葉集』における「あやめ草」と「菖蒲」をめぐる [J]. 文学・語学、1997、(10). に参考されたい。

^⑦渡辺秀夫. 『新撰万葉集』論——上巻の和歌と漢詩をめぐる [J]. 国語国文、1999、(09) : 16.

^⑧村上哲見. 漢詩と日本人 [M]. 東京：講談社、1994 : 123.

Degree papers are in the "[Xiamen University Electronic Theses and Dissertations Database](#)". Full texts are available in the following ways:

1. If your library is a CALIS member libraries, please log on <http://etd.calis.edu.cn/> and submit requests online, or consult the interlibrary loan department in your library.
2. For users of non-CALIS member libraries, please mail to etd@xmu.edu.cn for delivery details.

厦门大学博硕士学位论文摘要库